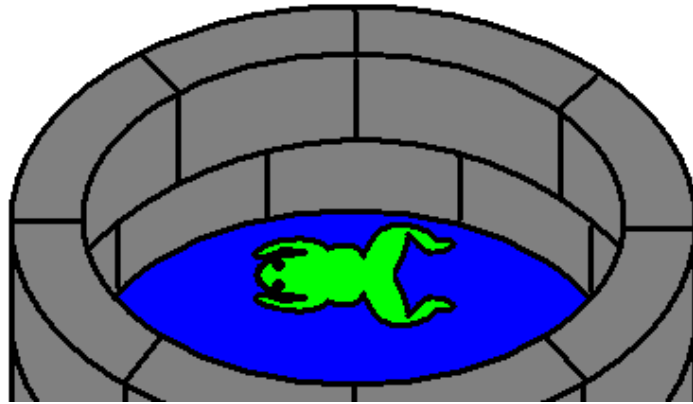


井の中の蛙



井の中の蛙大海を知らず、されど空の深さを知る

成功(荻須高德)

「成功とは頭に強い酒を入れる様なものだから.
注意する様に」



工学部の教え7箇条

(今野浩『工学部ヒラノ教授』)

- 第1条 決められた時間に遅れないこと(納期を守ること)
- 第2条 一流の専門家になって、仲間たちの信頼を勝ち取るべく努力すること
- 第3条 専門外のことには、軽々に口出ししないこと
- 第4条 仲間から頼まれたことは、(特別な理由がない限り)断らないこと
- 第5条 他人の話は最後まで聞くこと
- 第6条 学生や仲間をけなさないこと
- 第7条 拙速を旨とすべきこと

仕事：(村上龍『無趣味のすすめ』より)

現在まわりに溢れている「趣味」は、必ずその人が属す共同体の内部にあり、洗練されていて、極めて安全なものだ。考え方や生き方をリアルに考え直し、ときには変えてしまうというようなものではない。だから趣味の世界には、自分を脅かすものがない代わりに、人生を揺るがすような出会いも発見もない。心を震わせ、精神をエキスパンドするような、失望も歓喜も興奮もない。真の達成感や充実感、は、多大なコストとリスクと危機感を伴った作業の中にあり、常に失意や絶望と隣り合わせに存在している。

つまり、それらはわたしたちの「仕事」の中にしかない。

仕事：(養老孟司『ばかの壁』より)

仕事というのは、社会に空いた穴です。道に穴が空いていた。そのまま放っておくとみんなが転んで困るから、そこを埋めてみる。ともかく目の前の穴を埋める。それが仕事というものであって、自分に合った穴が空いているはずだなんて、ふざけたことを考えるんじゃない、と言いたくなります。

仕事は自分に合っていないくて当たり前です。私は長年解剖をやっていました。その頃の仕事には、死体を引き取り、研究室で解剖し、それをお骨にして遺族に返すまで全部含まれています。それのどこが私に合った仕事なのでしょう。そんなことに合っている人間、生まれ付き解剖向きの人間なんているはずがありません。

最近では、穴を埋めるのではなく、地面の上に余計な山を作ることが仕事だと思っている人が多い。社会が必要としているかどうかという視点がないからです。余計な橋や建物を作るのはまさにそういう余計な山を作るような仕事です。もしかすると、本人は穴を埋めているつもりでも実は山を作っているだけということも多いのかもしれない。

しかし実は穴を埋めたほうが、山を作るより楽です。労力がかかりません。

普通の人にはそう思っていたほうがいいのではないかと思います。俺が埋めた分だけは、世の中が平らになったと。平らになったということは、要するに、歩きやすいということです。山というのはしばしば邪魔になります。見通しが悪くなる。別の言い方をすれば仕事はおまえのためにあるわけじゃなくて、社会の側にあるんだらうということです。

悪魔のように細心に、天使のように大胆に
(黒澤明)

何でもないことは流行に従う。
重大なことは道徳に従う。
芸術のことは自分に従う。
(小津安二郎)

「作業」と「仕事」の違い、意識していますか？

「作業」と「仕事」の違い、意識していますか？

わたしは学生時代、ファストフード店でアルバイトをしていました。

アイスコーヒーをテイクアウトするお客様に渡す、ミルクと砂糖、マドラーをビニールに入れてひとまとめにしてストックする作業をしていた時のことです。先輩がこんなことを言いました。

「今やっているのは作業だからね。仕事じゃない」

最初は何を言っているかわかりませんでした。そこにどんな違いがあるのかも。さらに先輩は続けて言ったのです。

「仕事っていうのは、目的を解決するために頭を使うこと。作業は、頭を使わない、手ですることだからね」

その話でいくと、お持ち帰り用バックを作っているのは「作業」で、「仕事」とは「アイスコーヒーを飲みたいお客様に快適に楽しんでもらうためにできることは何だろうか？」と考えることになります。

作業に集中してしまい、レジに来たお客様に気づかなければ本末転倒。接客だけをずっとしていて、お持ち帰りに必要なミルクやガムシロップが切れていても、お客様を待たせることになってしまいます。

自分が今やっていることは「作業」なのか、「仕事」なのか。それを意識した上で日々の業務をこなしていくと、どこを効率化して、どこに時間をつぎ込むべきかが見えてきます。

仕事:仕事は一日も休んではいけない (橋本忍『複眼の映像 私と黒澤明』より)

黒澤明にはシナリオについての哲学がある。

「仕事は一日も休んではいけない」

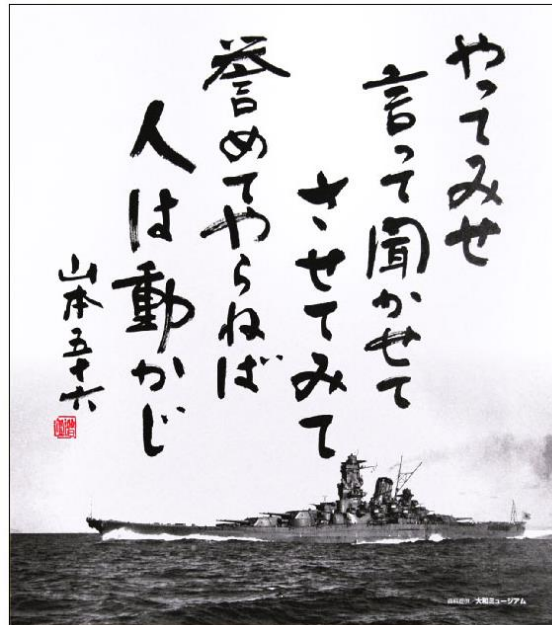
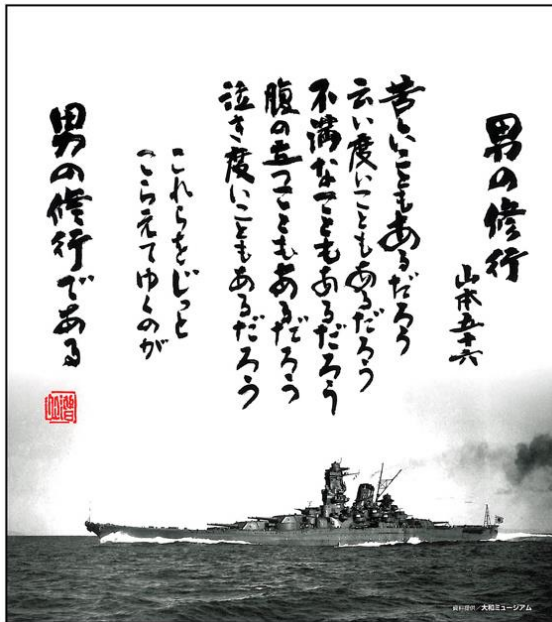
彼にいわせればシナリオを書く作業は、四二・一九五キロを走るマラソン競走に似ているという。頭を……顔を上げてはいけない。目線はやや伏せ目で、前方の一点を見つめ黙々と走る。こうして顔を上げず、ただひたすら走り続けていればやがてはゴールに到達する。

黒澤組の一日の仕事量は平均でベラ十五枚、朝の十時から午後五時まで七時間座っていても、五枚とか七枚の日もあるが、時には調子に乗り、二十枚、三十枚を超えて飛ばせる日もあり、平均すると一日十五枚程度にはなる。だから三週間籠れば、実働二十日間で、一本三百枚程度の脚本が仕上がる。

彼は能好きで、仕事が終わった夜の食事の際には能についてよく話すが、いつも話題にするのが世阿彌である。世阿彌は室町期の人で、足利將軍の後援と庇護を受け、数多い名作を生み出している。今日まで伝わる能の芸術性を確立した人だが、その世阿彌が、ある日、川船に乗り川を渡っているとき、中程で向こうから渡し舟がやって来て、船頭がお互いに声を掛け合う。おう、いい天気だな。ああ、いい天気で有り難いが、今日は体がしんどいよ。しんどい？ どうしてだ？ 昨日は仕事を休んだからな。

世阿彌は思わず膝をたたく。これだ！ これがコツだ、休めば逆に体が疲れる。稽古事には一日も体を休ませてはいけないのだ。

山本五十六



至誠^{もと}に悖^{もと}るなかりしか

(真心に反することはなかったか)

Hast thou not gone against sincerity?

言行に恥^はずるなかりしか

(言葉と行いに恥すべきところはなかったか)

Hast thou not felt ashamed of thy words and deeds?

気力^かに缺^かえるなかりしか

(精神力に欠いてはいなかったか)

Hast thou not lacked vigour?

努力^{うら}に憾^{うら}みなかりしか

(十分に努力をしたか)

Hast thou exerted all possible efforts?

不精^{わた}に怠^{わた}るなかりしか

(全力で最後まで取り組んだか)

Hast thou not become slothful?

(英訳： 松井康短氏)